

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 17 日現在

機関番号：12606

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520157

研究課題名(和文)音楽アウトリーチ活動の評価に関する研究

研究課題名(英文)A Study on Evaluation of Music Outreach

研究代表者

佐野 靖(SANO, Yasushi)

東京藝術大学・音楽学部・教授

研究者番号：80187278

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円、(間接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、学校を中心に50件以上の音楽アウトリーチを展開し、関係者へのインタビューや聞き取り調査を通して、音楽アウトリーチ活動における評価の重要な観点を明確にした。音楽アウトリーチ活動の質的向上に向けては、(1)準備の周到性、(2)コンセプトの明確化、(3)享受者の状況を考慮したプログラミング、(4)言語的コミュニケーションと非言語的コミュニケーションのバランス、(5)即興的な対応、(6)徹底した自己省察、(7)学びを継続・発展させる工夫、が特に大切となる。

研究成果の概要(英文)：In this study, we carried out over 50 instances of music outreach, mainly at schools, and clarified important perspectives on the evaluation of music outreach activities using interviews and hearings with relevant participants. The following are particularly important to improving the quality of music outreach activities: (1) Scrupulous preparation, (2) Clear articulation of concepts, (3) Programming that considers the circumstances of the beneficiaries, (4) Balance between verbal and non-verbal communication, (5) Extemporaneous adaptation, (6) Thoroughgoing self-reflection, and (7) Finding creative ways to continue and expand on learning.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：アウトリーチ 音楽専門教育

1. 研究開始当初の背景

音楽によるアウトリーチは、日頃音楽芸術に触れる機会の少ない人々に対し、「生の音楽」に触れる機会を提供する活動及び事業として、近年社会や生活の中に浸透しつつあると言える。音楽を提供する側と音楽を享受する側とが「双方向」にかかわり合いながら音楽を楽しみ味わう活動として、「音楽アウトリーチ」は、「出前コンサート」や「ワークショップ」、「楽器指導」、「教養講座」など実に多種多様な形式で展開されている。

このように各地のオーケストラ、公共ホール、NPO 法人、大学などさまざまな団体や個人によって音楽アウトリーチの活動が急激に広がってきている状況がある一方で、アウトリーチと称しながらも、従来からの「音楽鑑賞教室」の内容そのままの事例、アウトリーチの形式だけを模倣する事例、音楽的に質の低い事例、双方向のコミュニケーションがなされていない事例などが見られることも確かである。そうした問題状況を克服するためには、音楽アウトリーチの個々の活動をしっかりと評価、フィードバックして活動の質を高めること、音楽アウトリーチ活動の質の高さを支える人材を育成することが焦眉の課題となる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、音楽におけるアウトリーチ活動の評価に焦点化し、その観点や基準、方法等を明らかにすることである。

本研究は、音楽アウトリーチを「芸術教育・普及活動」及び「協働的な学びの場」としてとらえ、対象を教育現場（学校・幼稚園等）にしぼり、音楽教育学・音楽文化学的な見地からアウトリーチ活動を評価しようとするものである。アウトリーチを展開する音楽家・実演家、学校や幼稚園などの受け入れ側（子どもや教師等）、それらを仲介するコーディネーターや教育委員会等の関係者への詳細な聞き取り調査などを通して、音楽アウトリーチ活動のプロセスと成果を質的に評価・検証する方法論を構築することが本研究の眼目となる。

3. 研究の方法

本研究は、音楽アウトリーチを提案、実施、評価するアクションリサーチ的な方法が中心となる。そして、音楽アウトリーチの活動実践を補強しサポートするために、文献研究・資料調査、ならびに調査研究が位置付けられる。

具体的には、首都圏をはじめ各地の学校等の教育機関において、コンサートやワークショップ、吹奏楽など部活動の指導、音楽づくり・創作など音楽科授業の指導補助といった音楽アウトリーチの活動モデルを企画・提案し、その実践に関して音楽を提供する側と、学校など受け入れ側双方からていねいに聞き取り調査等を行い、その成果や問題につい

て分析、検討を行う。

音楽アウトリーチを「協働的な学びの場」ととらえる本研究では、演奏家・実演家・作曲家といった音楽を提供する立場の専門家と、教師や教育・文化行政の関係者が相互に協力し、学び合うネットワークを構築することが大切であり、そのような関係性をどう築いていくのかが、音楽アウトリーチ活動そのものの評価にとっても重要な点となる。

4. 研究成果

(1) 本研究では、3年間にわたり、学校や幼稚園を中心に50件以上の音楽アウトリーチを実施した。内容は、学校側の状況に応じて、鑑賞目的のコンサート、体験型や創造的なワークショップ、和楽器や管打楽器などの技術指導、音楽科の授業とリンクした学習指導の発展系などさまざまである。そのほとんどは、少人数編成によるグループ活動で実施された。予算等の物理的な制約もあるが、音楽アウトリーチの活動を音楽家相互で、また学校側ともていねいに振り返りやすいため、さらには同じメンバーで次の活動に反省的に生かしていくためにふさわしい規模と判断したからにほかならない。

(2) 音楽アウトリーチの実施者である音楽家たち、受け入れ側の学校への聞き取り調査やインタビュー、アンケート調査を通して、音楽アウトリーチ活動の質的向上に機能する重要な観点が明らかになった。言うまでもなく、通常のコンサートなどの音楽活動と同様、音楽アウトリーチにおいても、音楽そのものの質が評価の中心となる。しかしながら、音楽をともに楽しみ、そのよさを味わうとともに、ともに学び合う場として音楽アウトリーチをとらえるならば、その活動を次の7つの観点から評価することが重要となる。

以下、各観点の意味や具体、機能について簡潔に述べることにする。

準備は周到に行われているか。

準備の周到性という観点は、多様なレベルにわたっており、以下の観点とも密接にかかわるものである。

第一は、事前の学校訪問や情報交換のレベルである。受け入れ校側の実態や要求をどの程度把握しているかは、アウトリーチ活動の評価に直結すると言っても過言ではない。特に、事前の学校訪問において音楽科の授業参観を行った事例では、アウトリーチ活動の内容は充実し、学校側からも高い評価を受けることになった。演奏家が同行できない場合は、コーディネーターだけでも訪問し、授業を参観することが大切である。子どもの学習の様子を知ることは、アウトリーチの計画、構想にとって貴重な情報となる。第二は、アウトリーチを提供する側、つまり演奏家同士、演奏家とコーディネーターとの事前打ち合わせのレベルである。このレベルでの準備は、

どのアウトリーチでも行われているものである。問題は、双方向的なやり取りがしっかりとなされているかどうかという点である。どちらか一方の意向だけが強く働くようでは、アウトリーチが「協働的な学びの場」とはならない。第三に、演奏家相互の音楽的コミュニケーションに関する準備レベルである。質の高いアンサンブルや充実したワークショップを提供するためには、事前の入念な練習や合わせ、音楽的なチェックが不可欠である。

コンセプトが明確になっているか。

これも準備の準備段階での作業となるが、アウトリーチのコンセプトを明確に焦点化できているかどうか、アウトリーチの成果と強く結び付くことは明らかである。しかも子どもたちにとってもそのコンセプトがわかりやすいものであることが重要である。学校側に納得してアウトリーチを受け入れてもらうために、また、音楽家たちの意図やアウトリーチの方向性を焦点化するために、さらには、アウトリーチ活動の評価の根拠を明らかにするために、具体的で明確なコンセプトを相互に共有することが大切である。

受け入れ側の実態等を考慮したプログラミングとなっているか。

この観点に関しては、本研究を通して新たな気付きが生まれた。それは、「子どもに馴染みの曲を提示すればよい」という単純な図式ではなく、演奏家にとって「この曲はどうしても聴いてほしい」という十八番の曲は、アウトリーチにおいても評価が高かったという事実である。すなわち、「子どもに親しみやすいプログラム」と「演奏家が聴かせたいプログラム」という二つの方向のバランスが重要なのであり、学校や幼稚園の要求とのすり合わせが大切である。幼稚園の事例であるが、馴染みの曲では子どもが興奮して鑑賞が成り立たず、クラシックの名曲で鑑賞が深まったケースがあった。実施後の聞き取り調査では、曲目やジャンルよりも、むしろ曲の長さやアレンジが、子どもの発達段階に合ったものなのかどうかことが重要であることが明らかになった。

言語的コミュニケーションと非言語的コミュニケーションのバランスは取れているか。

音楽アウトリーチでは、ワークショップや指導に限らず、コンサート形式のアウトリーチにおいても言語的なコミュニケーションが重要な役割を担っている。ただし、事後のアンケートや聞き取り調査で明らかになったことは、言葉だけではなく、演奏家たちの身振りや表情、服装などに対し、子どもや教師の注目が集まっている点である。すなわち、聴覚的なコミュニケーションが中心となる音楽的なアウトリーチにおいても、視覚的な

コミュニケーションは重要な役割を果たしているのである。また、言語活動においても、話の内容はもちろん大切であるが、話し方・かわり方などからうかがえる「人柄」に対する評価が教師側から多く寄せられた。言葉だけではなく、非言語的コミュニケーションによって醸し出される雰囲気やその人柄が、アウトリーチの継続性という点ではきわめて大切となる。アウトリーチの内容や形態、子どもや学校の実態に即して、言語的コミュニケーションとさまざまなレベルの非言語的コミュニケーションのバランスが取れているかが、音楽アウトリーチを評価する重要な尺度となる。

即興的に臨機応変な対応ができているか。

音楽家と子どもたちが多様にかかわる音楽アウトリーチの展開においては、即興的で臨機応変な対応力が求められる。例えば、子どもからの予想もしなかったような質問に対しても、ていねいに受け答えする音楽家の態度、少し集中力が切れてきた子どもに対し、咄嗟にリズム打ちの協力を求め、ともに音楽する活動に引き込んでいく音楽家の判断、音楽づくりのワークショップにおいて言葉や身体感覚を駆使し、子どもに音への具体的なイメージをもたせようとする音楽家の即興的な対応などは、教師側からとりわけ高く評価されている。

自己省察を徹底して行っているか。

音楽アウトリーチは、提供を受ける子どもたちはもちろん、音楽家自身の成長にもつながる活動でなければ意味がない。そのためには、音楽家自身が活動を真摯に振り返り、次の活動に反省的に生かしていくというサイクルを徹底させる必要がある。音楽アウトリーチ活動のプロセスに新たな気付きや発見を見出す姿勢、そうした意識を音楽家もっているかどうか、活動そのものの評価の大きな分かれ目となる。

日常ではない「非日常」の音楽体験であるアウトリーチの活動に対して、子どもたちからの感想アンケートが高い評価となるのはむしろ当然と言えよう。そうした高い評価に甘んじることなく、音楽の専門家として自分たちのアウトリーチ活動を振り返り、新たな課題を見出していく姿勢が音楽家に求められる。こうした意味で、音楽アウトリーチは、音楽専門教育の重要な一端を担うことになる。

学びを継続・発展させる工夫を図っているか。

の振り返りは、音楽家のみならず、コーディネーターや教師にも求められる。それによって、音楽アウトリーチの活動がともに学び合える場として機能することになるからである。言い方を変えるならば、それぞれの立場で、協働することの醍醐味を楽しむこと

がアウトリーチ活動の内容の充実、さらには活動の継続・発展につながっていくのである。とすれば、ともに振り返り、学び合うという学びのネットワークをどのように構築するかという点が、アウトリーチ活動全体を評価する上で大きなポイントとなる。

当初から、ある期間を通じて継続的なアウトリーチを実施するように計画されている事例の場合は、成果を蓄積したり、課題を相互に把握したりすることは比較的容易である。音楽アウトリーチがたとえ1回限りの場合でも、機会を見つけて音楽科の授業を音楽家が参観したり、子どものその後の学習状況を教師側が音楽家に報告したりして、子どもの学びに音楽アウトリーチがどのように生きて働いているかを相互に確認、検証する方法はある。そうした努力を惜しまない姿勢こそ音楽アウトリーチ活動の本質があると言っても過言ではない。

音楽アウトリーチ活動は、まさに人間と人間の生のかかわりでもある。音楽家たちの音楽に対する熱い思いや真摯な取り組み方などが大きな感動をもたらすことは、子どもの感想アンケートや教師の聞き取り調査からも明らかである。音楽アウトリーチ活動によって子どもが何を身に付けたのかという短期的な評価も必要ではあるが、長期的な展望のもと、いわば音楽の「種まき」として音楽アウトリーチ活動を機能させていくような戦略が今後一層求められよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

- (1)市川恵・佐野靖(2014)「歌唱指導における教師・子ども・教材のかかわり 子どもの歌唱表現を変えたもの」『音楽教育研究ジャーナル』第41号、東京芸術大学音楽教育学会、pp.44-55、査読有。
- (2)佐野靖(2014)「学校音楽とアウトリーチ[第3回]」『音楽教育ヴァン』第24号、教育芸術社、pp.30-31、査読無。
- (3)佐野靖(2013)「学校音楽とアウトリーチ[第2回]」『音楽教育ヴァン』第23号、教育芸術社、pp.24-25、査読無。
- (4)佐野靖・小井塚ななえ・松浦光男(2013)「学校音楽とアウトリーチ[第1回]」『音楽教育ヴァン』第22号、教育芸術社、pp.24-25、査読無。

6. 研究組織

(1)研究代表者

佐野 靖 (SANO, Yasushi)

東京芸術大学・音楽学部・教授

研究者番号：80187278